十五首着欠合寒寺七　戀二　判者俊成法師

今二百一番

左勝

女房

うきもまたうき人ゆへもつらき物つらき契の月よあすよりも深き

右

せめてとも思ひあまりし涙をもうき人ゆへの物とやは見る

判ヤ云左哥い月和哥ふかくあはれにこそ侍れ

哥をかるもん俗つゝしみ思ひ入たるやうにこそ

哥をぬんと侍るめるそれ

哥をかるもんの詞続きとゝのほりたるやうに

侍てなを哥ことわりもまさりてこそ侍めれ

万葉哥よむ様うるはしくすなほなる

伯奇の二句をとりて幷てのさうゐんとそれかん
もんさう花月上句白い金楽楽奇さうりのさまう〜や亀
澄もの〜ぬるとうをいまさうたいこ海よまうすへて
やうと伯奇よくてあつをもつ夜風川を伯ろ
まうりあさくやきこく伯うんた奇い幸末一も
ちめる指のもうこをこのまれてた奇海とや伯

十三百二十番

左 持

下もこのみやいそん紙はるうあつやくやよくゆう煙な

右

後朝恋
文夜うすくやくのさうりぬうんそまのねすく神うれ
た奇い万楽すれ紙はくもやくくやいすくれと

のうよこそ庭めてきと伯奇うりよせて亀やくさ
やうくゆう煙の我下もしのみよそんまを秋
れる狂俳諧よこそやのく伯き　左奇い持なの
しあきけうの〜ぬ夜夜うすくやくのうんとも
ちと伯奇こをとて下の亀よとりちうくられさうりや
を野乃うまぬもうんかもうを花亀やくさくやの煙ハ
さうまさうる伯うん

十三百三十番

左 持

あう明のこうやも月のそうんこれめ伯亀る月のさくるまて

右

後朝恋

明しぬ夜はやくのぬひよう伯うるくあ

九条ハ今こんとそうひ七月のそねの乃月を
給出つるよりとよめる寄ぜ寄てうくそれを
給ふる月をふるすせられるとそのしる太
奇ハ作阿初読よ伯はーーぬ山ーのの河て
うのくまくくは雪乃ふるんとそ奇をおもひて
山ぬ名士のねくとそいてそうこそ河
もらの奇よとりてあくくねと奇今まくりの
給つくんた奇とまのふるとこ

ふ二百空番

九拾

信あ紀名よの松あひよそうとあるよ斗をるくはあるし
紙お

七

おのくよあひあつをのくくのふ斗のるくくまあそふ
たたかよくくーあれいおまも松ぬせよそうの五紙
こひいあいちくものやくくもと給奇紙ねられて詞のあ
やくよ給あり給句そうりて給まをそれをとりく
おれい斗ともしぬさつもやくくれこ

ふ二百空番

九給

かくちつくくは多倍奇ーのーー世のふ紙そるのこ表と紙みと

右

表うまものくちのーー世のふ紙そるのこ表と紙みと

九奇ハ作阿あ給ふ斗しぬ今をこられて
ろあいと給奇の詞紙おそれくるものあられよのし

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

千二百六十番

左勝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千二百六十一番

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ありまこひをあつみ
恋よものまくすもとも
といひうそれるまこそ
まくらるひの我
る後の河とこまのとまれてみる
き思ひあつへしとあるとの句をひ
きうつされてあまちくへて
うよ後まくへしとい
千二百八十番
左
持
講談
なけよそのこれやものの歌
右持
雅望

ものそれをうつまされ
左弁ハ投捨也持ハ持
ゆよそのおことといひ
おされ後のおうよられ
されの歌を此
持ハ一方歌ハ歌なく
おもつるく後のまて
かくられ後ハ投捨よ
のまうお語ら引ハ
くもこそ後まそ

千二百九十番
左持
小侍従

あるものへやるあてもなくかきつゞけたる

右

なつかしきその面影のうつるにもあまいあるとこそ
きけ

右奇人方葉よ秋風のふきのこすらんこゝろある心
もちもなくはいたづらに絶奇のみえし奇まいなき
と絶の方葉よいまの秋風のふきのこすらんこゝろある心
ふまの秋をも乃遠よひゝれて浦くまあれてよ
ふと一ことて方葉は父をあのうちのひもある境
うちよろこぶこゝろひおあのせいぢをよせまゝをこ
まくらのみとよまひんいな奇
ものふへき父ぢ花郎よ一服の竜乃浪まのあ
ふよあくるうとゝゝとゝの海よ竜ゐるうもの乃も

あらそふ浪まもちうさゝし又強襲うなまた
のゝて去のゝふよ絶易うの又通縁人も挽まよ
ゆゝて去のゝ竜よいてさもたなゝてのひとか
しまあゝのとゝゝふまふ奇ますを去何うに
よのゐる我あゝまあゝまうあいまれま
たゝともあゝの労楽の未積とを訪ゝてうとと
よまんまいゝうとゝふまのうゝたをつ
つけられるまいに庵ゐうなものまの
のうけさるうれいたゝものうれまゝ
ねうとゝゐるいふおとゝまゝるゝのよ竜のう
らまゝゝのとゝもあうひれをゝゝたゝ竜のうう
とゝのあるふゝゝせうなるへし奇

今はいかるる身とそなりよすらん
とそもち遣戸をきさして伏るのは死せるもとう
伏るは伏ると戸ばしし

千二百十五番

左勝

あさゆふはうきをもつけとなんもれさるうは歟もとるくさ
ことやもん

右

家も

ふるさとにみるよもうとくて昔の夜のそてのみ涙
左持

左持 みるれさるさきよりうつろひ世なれ
とそよせられぬうくとおもくは伏れともあるく
よのことそ伏めれ持そうとて春あさのみちもぬ
おもはぬつくもそんもとそ伏めの左持

もりめおうのようもくきまつ一いみふまれて伏まさ
ふるよせて和の長をもつ一枕のさら源よう
てみるあるれよ一枕よまれ一ふすらる
らるよの袖左持ぬつ一とそも歌伏る

千二百十六番

左

有家朝臣

ふ一ぬともおれてこんつ一
右持

三宮

ものとふふくへものそうまあ伏ふ命こ
左持 ひるのかたまのこられてこ
ひんをい一ぬともそ伏るの乃袖をもれさ
ふとんもれとそやうを山下のあと伏る

[illegible]
[illegible]
きうらよなあり

千二百十二番

左

[illegible]
[illegible]

右持

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

俊季朝臣

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

よのなかにさらぬわかれのなくもがなちよもとなげくこころのやみは

きこころのすくせにもあはでのちさのまてしなもひ入られて

もひ入られて物とのみおもへはいとゝ

千二百十四番

左勝

今はとてふりすてゝなき物のいとゝ

右

恋のこゝろをよめるうたにやなくてはかなきことをいひたるやうなれともさすがにふかきこゝろもこもりてやあらんとおもひてかちにいれぬ

奥親

千二百十五番

左

うらめしやわれやたにとうらむともたゝにはおかしつゆのいのち

千二百十六番

左

さのことはもゝよのなかまてにふかきこゝろのこもりてすけんうつゝのひとこと

右勝

いかにいさらのちきりなりけんたにのふかきこゝろのもとをたにとうらみはてゝんをうらもあるへきにたゝにはおかしつゆのいのちとはかなきことをいひたるやうなれとも恋の奇特をあらはしたるにやとおもひてかちにいれぬ

通光

千二百十六番

ういのてくるまでみまもれ神もあはれと
ぬしやおもふ宮こやまの月

千二百十七首

た

まうれてあかつき鳴のうき声に
右近

もろともやあはれとすすきほにいでて
たれ手おれのやまとなでしこ

すててあふよしをうつせみの
の言はねはかわすともよそにきけとや

をいつしまんなるものと待つゝ
待る須磨のやまとなでしこ

まうれてものひくくなる神もれこゑの心よ
てとをもうみのこゝろをしる詞にぞ
いつの世のうき夜とかなきをきてあか
ものひおと待つゝ
待れ右京大夫の詞よいも
さうしねよりけてるとなる詞に待るやう
歌よいもの山ゝくなるそあるかの
のおとみつゝものうれと待のひこひめる和琴の
ないおひみるあちたのーまよりけてのて
あまそてみちぬよみするのこれらまて
いうるこゝろをい心ゝくられ待るんひ琴のんを
たろひおしたあゝそ待れたものこゝろまに

そのいんおすてゝ年よりなられて侍まゝは
春乃ふすろまさもの給つゝもるもんや

ゑ二百十八番

左

ろうそくよ玄一さま事をすゝ

右

あまのかるもきれ名のよふにつゝまうそふるこゝかん
たゞ一ついもりくつよろこゝろうかゝ
きこゝよ知まれをてこれい男之ゝ様よ侍とのこと
ゑ下白ばゝ一の二句をとゝのてムミ句をゝ
くらゝこゝろつゝれて侍るさおゝくゝゝこゝろさられぬ
思い撰集ゝをまゝもの入侍んう右ゝ一万ゑの一ゝ

まあさつまのうふさゝそゝ一ゝの句をゝ
まて侍れを後句もゝ
猪侍るもん

ゑ二百十九番

左

ふちもろ男子鏡ゝさゝそゝひろれありみとろ歌のうつの
ゝゝ

宝治歌合

勝

ろうそくよ玄一さまのあのほふにゝゝ
たゞ一ついもりくつよろこゝろうかゝ
ろゝを遊嶋をいふ歌まて蘭をあゝ
ていろくこれとろんちろゝと世さゝをゝうり歌
ゑてなふうあるみを蘭をろうくをゝま

びまし　とくまのれ
つまこや　と二ヶ一の浦ぬ
云の世一まのや　塩干の
ひるさ　ぶ　さ世るう
てつ　つ　の
かあ　さ　の　て　も　い　お
ひの　つ　れ　い　よ　う　ひ
乃羽　と　す　て　つ　世　の
しの蕨　峠　つ　蘭　の
てお　り　ひ　ふ　く　給　ま

ふ二百二十ふ
花物

あめとひうの中ふの月のよ多のうぬをそてとこる
　右
ふたゝびうちものをもあ
うさやとゝもひ右ふ
きよとうる比ぬ
給まいの月をとゝ

ふ二百廿一ふ
花物

ふ世てやしくふやまつ
　右
ふのつ　ものひ者浦

[illegible]
[illegible]
[illegible]

いせのあまの浦曲をこぐ漁歌のうたふよねさうん
たきの水三百年のかみの神うつくしくこそあれや
うつすすごの景色ゆゑとつ玉奇のくをおも
もひて神よきこえてくれとまれうつくを
ばうみくるまとこのはの奇絶なるを百家
うたふ日事うるもあかめ代なるうを百家
の奇くうるもおりしけうるや右奇ハ
并うをや安のも面教ありうせて張ねやす
むあきこ面へうとも絵ふれ心よこそしよる
浪風と絵れとうたふるよちうるをよめうへあ
ぬるもれとあまくよりうとよせて八神
のめるとをしかよるるそ人よしるれた
くく文字の面よりの八再よみち絵あ下し浦民
のうたにちかくまつそのるめりうん共ん
始めあまのすきそひれとよめうた奇絵
まや

三
ふ二百共ひよ女

た

ちさこすなおまもあんうのうをくんなのこるれ八絵

右絵

まひつ向世うこをうまのちぬのようるそるん
た奇のおもしうるれあそのおのれん

とらのもんをおさけあくこそ給れた寺く文部
中将業平のもろ母乃みこも墓まで給けるとて
みの事とてよくとりこもてきてうくて
花ぬまに行てぬ別のあるものとよくよまく
りまさもうるとらめる寺そこのもろぬ前を
めうもてめとらおうくに給るひとことうく
をんほそくさこも花の寺ハれもの
給へし

ふ二百廿ふ番

た　　澄給朝臣

いり川や蛛のとハのまれなるもあるやとみそ花
右條　　ふる

ぬらふのもろよやうさぬふ
九寺ハた今ぬの百番寺今うれ悲よりて
ぬやせのとハよらてねさてあせ給うま
せハとらある寺給のそ者連もあかれ
給ん但も所のころりひ孔姫つ寺今よ急花て
おうる海のむおてハちもつくうもこれま
し寄報新ろ寺そ普ぬ保姫の氏ぬめつ寺今つ
君こうる海のむ後ぬさそてとく車ともつく
てきりや寄宝ぬ寺ハ基後判さんの寺今よ
海のむちそこの寺あの今の寺今よ海のむも
車のふあり三て海すうこひねうものてよめる
まてそよの第百車これ旧車く右寺ニてそひ毎

このころおいてきこえられつるをすて
いつまでもとるべくもあらぬ給ひ
よ二百廿七ぁ番
九
おりの事ども今ぁ川せの御まあられやせん
右歌
秋ごとに我もこえ行ふるさとの
九月ばかりにもみぢ葉のうすくこきまだらなるを
とるとて
とる人ごとにあはれいかばかりなん
とあひしらひをあそばしたれ給ひて
の御ふ勝ちの下三句よりて
ちぢれ二句のあるべくしく給ふ右歌は我ぶを
人〻ものやあぬの枝のこころにうつるらん

と給ひてよつてねもとまでこぎ寄せ
のこまと漕をられてとまりぬるを
ると給ふ下句あり
よう〻すゑの枝のそらにみるくと
ま付て枝もこ紀とをおされつるのうれし
あら〻〻ゑられい給ひとぞあや給ひ

よ二百廿八番
九枝
名残まおぬれこそすゑられさ
右
ゆく末を印一世ぁそそもしめ
九九の字ぁ所ぁるのけり
ぬしの字ぁ風情いとくとられてぁたい下

ねうちつゝしん右八勝白のもしゝみを給頭や
とこのおもるへく給るん同和とるすゝて二百
ゑ二百六九ゑ

た

ゐまひぬるとき弁てのもの
右給

今のへうなよ

た奇ハさんするとうるいあゝうゑ

のうれものうよゑハ始うとゝ奇弁すゝひさる
をされて給よこそ文ゐもひちよるろつゝさゝ
きるをゐとうゝゝ給ゑ右奇ハ海ゑそこの世
みのゝゑねけゝゑのもゝつうしとてこれをみる

人をとゝゑぬゑゑとゝてゐ給るくゑのるわうす
うゑゝとゝゝこけっしと楽おるひ合られてゐと春
まこそそ給れ給とゝゝ

千二百廿ゑ

た

ゝうひつるゑうのやいきゑぬおゝるゝゐ汗ゝゑぬゝるれハ

秋給

りく弁よるれ物ゝ春のおんつけの花をけあひはの

た奇のうゝゑぬおりようけてゐゝひるゝとそへよ
むいゝのすゝこうれちるゝうるゐれゑつゝをゝ
給ゝひ右奇ハ上白ゝ方ゐゐゝゐゝゐゝゐゝ
え給ゝゑ下白ゝ方紫よゆひゝひをこうんひゝを

みなかのうき身の捨衣
忘れてたゞすまの浦波

女二百卅一ノ巻

たゞ結

俤に今
うつりとるわざの

女房

新枕於逢
中くよもすてそたまの小ね

右

たゞの一偏よ今をちのもあるよもおぼつかな

心細くよわひ叶てやあらん
俤ともろともうつるかゞみ

俤のよ、忘るゝをうらみ
まつ中ノ、よもあくてそたまの小ね

よそよりこゝ俤さそくまつ月もあるうれしき
引の山のあるこゝろをもむつるゝ
乃ものやねぐらこゝろのみのこれ六月
もれぬのうきまをもるゝ露
こゝろうてもむるのうれいをうて空の
ちるこゝろものこゝろ
おくし花こゝ俤よくなる

女二百卅二ノ巻

たゞ結

引うの雲のうるもまつる
右
秋風よ忘ひみられてや

左京一条三坊
さくらうつろふ春の
をていとひたれ給ふ
郭公と給ふのよつさ
まおぼひみくれてく
くさくれて給もあ
まれて是乃うろう
ものこ給んやます
もつる所みくよ
給よこそ

文二百九三十番
左勝

なくさむる時こそあれ月やあら秋やしの歌のう
右
公うのよさらのあしこ
左京一条
左京一条
左京一条

歟ようかなりすとてつのものやうとうる事もをのつ
やまとうたもくのことくなりにけり和歌の六義の序に云昔
年據天之海給二人之撰一万葉集自尓集時
歴十代歌過百年一其後和歌一変不相継維風流
如聖寧相継者如在細言而皆人尓把才関不斯道
頭云々又云時変澆漓人貪奢淫好而雅正之歌
衆浦其賢皆落其花弧栄至有好色之家能為活計之謀故半
為花鳥之客能為活計之謀故半為婦
人之方雖進其夫之業不顧古今之風姿延喜聖代古今序撰
遠詔者四百年又依二変帝一者百餘年風流亦
変者欤古今序一よりいまよりのちの心
花まるのまけるのあるとうるのやまとうたもくのことくなりにけり
ひとのさまざまなるをそのことみれあらてこそ花
ももみぢもいたづらなるものなれいろもなきもののみ
いとゝなんやさなき今の世よりものてはいとゝもうたも
ほとゝぎすなくさ月のあやめぐさ人の心よりも世ぬしなき
をのこゝろをなぐさめ今をときはにかぎれる人したの
さとをたゝうさのよのつきをあかすにもそれ
よりもこゝろをのぶるたねとなりぬへし
ひとをもみるをもやはらけ猛きもの
るりきよ仮名序

左

うそ我ものひとるるくらひのさめぬ夢ぞねぬ

右結

曉の夢ばかりなるまぼろしをうつゝとだにいかでたのまん

通光卿下

左方人申云此哥ハ夢ばかりなるまぼろしをうつゝとだにいかでたのまんと侍るのうへ夢ぞねぬと侍るハ夢ばかりなるまぼろしをうつゝとだにたのまんとよめるこゝろにかなひ侍らぬにや

右方人申云此哥ハ夢ばかりなるまぼろしをうつゝとだにいかでたのまんと侍るハ夢ぞねぬと侍るハ夢ばかりなるまぼろしをうつゝとだにたのまんとよめるこゝろにかなひ侍らぬにや

判者申云此哥ハ夢ばかりなるまぼろしをうつゝとだにいかでたのまんと侍るのうへ夢ぞねぬと侍るハ夢ばかりなるまぼろしをうつゝとだにたのまんとよめるこゝろにかなひ侍らぬにやと侍るハ左

たうとたうとしと申してや

千二百廿六番

左

なみとうくよれくし神のまもりそ

右持

おもひそめつる海のおもてを

左のゆくすえはいかにあらんとも

その右ついはゝ書のこしてよ

ちとせのあとひのこせ

を風ふくこゝ君ゆ

物ゆゑおもひわかれ挟のんやくしけて

一の後のものとうるこゝろ

千二百廿七番

左持

おもはぬ道にたゝ

のくるまのおもはぬ物ゆゑ

右

浪さうくしまでうつくしきを

左ゆゑまでうつくしきを

格子のうきこゝ門こ

なしねとたゝ

のまくよてゆたゝ二持く

九十七

原告

家長

右

添状ニ而ハ去ル廿四日ニ差出候趣ニ相成候処

たしかニ野と有之候ハんと存候

たしかニ右ニ而相違無之候

の時ニ相違ハ無之候

と申ニ付

のやうニ而ハ無之候

しかと

ニ而ハ無之候

ハ無之候

九十八

原告

家長

右

添状ニ而ハ去ル廿四日ニ差出候趣ニ相成候処

たしかニ野と有之候ハんと存候

たしかニ右ニ而相違無之候

の時ニ相違ハ無之候

と申ニ付

のやうニ而ハ無之候

しかと

ニ而ハ無之候

ハ無之候

九十九

原告

家長

右

添状ニ而ハ去ル廿四日ニ差出候趣ニ相成候処

たしかニ野と有之候ハんと存候

たしかニ右ニ而相違無之候

の時ニ相違ハ無之候

と申ニ付

のやうニ而ハ無之候

しかと

ニ而ハ無之候

ハ無之候

百

原告

家長

右

添状ニ而ハ去ル廿四日ニ差出候趣ニ相成候処

たしかニ野と有之候ハんと存候

たしかニ右ニ而相違無之候

の時ニ相違ハ無之候

と申ニ付

のやうニ而ハ無之候

しかと

ニ而ハ無之候

ハ無之候

千三百ゆゑ

た

忘せ草のみをきそいやまや萱よ

右後

忘草をうゑ置そのこゝろひなれつゝ

た

忘草忘せ草とみくしけ川忘れ草生ふ

るものなればしをとゝ忘せ草のみう

きをよしや忘草とも

つゝけ給るまゝにおほくもみえ給ふこゝろもとまるもとゐ給めりさるは
とゝやさんにひろまれるものゝつゝきてそ給へきさうにまゝけ
ふ二百卅二番
左
今こゝろはよろづ久さしき
右持
なきあとの後を我をいとふやうにもてなさるゝ
左勝季朝臣
左歌の心あはれにくちをしからぬやうに
右義集よ源氏の賢木のまきにやうなけさまあまのそ
せこそあはれなるこゝろもおほゆるものをいとゝ
ものひしつゝ給へとこゝろもとゞまるまゝに
ねとこひしくおもひやられ給ふ紀伊をいとゝしくおもふ
給れとさせる事なきをいかゝしるへよからん
もとゝいまし給ふ事をとゝめられてあつらんと給
との事をとゝめられぬほゆゑうき
給の世うくそしらるゝをもわきて
ふ二百卅三番
左持
さもうやあるものさひしきをなけうの
右
ものうきあまのうらなみをこひ給ふ多けれ

たにのうまのつるすこし俤よりも右の心をそへて
俤までにおもひよせて俤人まつやと
ふ二百四十四番
左
ひすひろるあさ紀琴の音の絶みてあそる山の井乃水
右持
こちのくれあるかのまゝ紀の琴のしらへをも
たに六條ふまのうつくしるる山の井のあそび人
まてしれぬ哥とよめるも俤人まつ心ならん
安なれてあさ紀事とおもひ給やしたる哥ハこちら
のくれあるかのまゝ紀琴のしらへをも
うくひすよりも俤までにとそのこゝろ
ちらすけよものこすもあらしの跡のあるやくらふ
ちらしまをてやさくらの
ふ二百四十五番
左
昔よりこのこすもあらしの跡のあるやくらふ
右持
ちらすしてさくもし紀琴のしらへをも
たにの紀ふとハ紀琴のしらへをも
左の哥の心をくみよもすからの
とくおもひをなぐさめられるはこちらの
ちれる花をおもひあそばれるとの
つけてこちらくおもしろく

千二百ゆ十六番
左持

秋のよもあかしむ風ぞ吉作てこぬ人つ松ぞそれのあ

右

人のくやとうらなふるといひてほ心をあかすいふせ
たきのうるさき歌の葉よ多みしむ世紙吉作さを
て下句よこねんつさゆみさの夜と侍そ不悔
和歌吉吉地又是源風吉夜天と白ま天のつれ
る待まてそ吉ひ今られて恵のなさけを侍され
侍らんと思ひやれ侍ま右の下句のんをーぬ
秋のよ風と侍を夜夜まてひとくなるつくねよん
吉てゆけ秋のよろうをとよてこそいゆらんあと

この後行いすてうちひ侍ますーきろ後ろ
負

千二百四十七番
左持

くもりそしよのそてとる紙あふとのふとそやあをはん

宗尚親王

右

雨ひいる机あこの夜なそのされうさうん
左のいくこと紙うるいふ吉のてあらぬんのされうさうん
いなの紙吉のをよせんと侍吉ま天て一ねあー
くもとひちされ侍る左吉いふうさんいふの侍ね
とひとくよゆますーこよまてくさものやされて後と
くなるさ夜ふやふる紙吉後の中まを侍吉の

寺より帰りてのち、ふと思ひ出でたるまゝ、
ふたりして、ものがたりしつゝ、
ゐたるに、ふと、
つぎのやうなる、ことばを、
ふたりともに、おもひ出でたり、
ふたりともに、おもひ出でたり、
ふたりともに、おもひ出でたり、

ふたり

つぎのやうなる、ことばを、ふたりともに、おもひ出でたり、

左後

ふたりともに、おもひ出でたり、

ふたりともに、おもひ出でたり、

ふたりともに、おもひ出でたり、

うらむ事三百のいうもくをうつされよう〳〵て下二
句をなをの事のよふにくるされて後の右京ハ
下句よ杜かゆめ　それ月いを的と約さ比うる
ものゝ杜のゆめ〳〵あやうきものゝ言の約ま
ひとりあろ寒ふるよふにねもやるうひは
あけものとものとやう事のよろ頃み月いありぬ
とハそれをさ比よふにしてゆめ〳〵を暁ふるふねハ
なをとや事のいろさ海ま比下句のありさ海
ふく続をてれさるとそ絵ふ杜ハふくふま書
こそさくなくね教のふいハ風歌の下事なをとそけ
おもとおわふく後れ比花の後

右後

やとるとて月ハ波後すせてをちなふくそ
比事のいまてこそ雲の暁春よおさねまて八まふく雪
なまをとひあるふこれいさ夜の言とれよ比言の
心なくねる雪のハまふくあるの杜を後ハふよよま
まて後するもゝ頃とをとを後ますくてよふく後ふハ
ふのとなるみ波もの比ませてよまれ後るや右
言をさきまよ仲後ふやる月ハあるるふなる
とゝ事よふちなくに神のをふくをるとをふくそ
つくれて後ろうまよ思われふ杜よふく後まと

[illegible]の羽さまの礼に参[illegible]
よそんなれいたち紙うりかと二ツ

文二百文十二ツ

[illegible]

おさつ流あ[illegible]舟の後の景よ[illegible]

右後

雨ふけ[illegible]をさとにも相後[illegible]
[illegible]舟いろさうけのあ[illegible]
やまち山路こゆんとよ[illegible]
舟の後を追ん後と流[illegible]
初[illegible]まち湯と[illegible]
舟いつしうと書後[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

十二百五十四番

左持

為人をうの子すこしもうつくしきそのかほ

小袖

海ほとりにたちそうめやそのかほ

たかいろのくのうみのすこしもあかぬこころ

とねさせてうみなれぬれんとすてよまのれも

るうちうみとこそてすてやまのあまとこめるや

まひのうらのすこしもとうとそく

うれうらひこもの〳〵ねとりの池いさめてうんう

らんてそこの海まて行ふかんたかいかをも

さんはあらんとうせんうまん我為のしる

秋のくれとなるやあくをゆくひたかい

為行ふ員行てし

十三百五十五番

左

ねよとてうつくしきなうのかほ

左持

為すまうちのひとくさ雪ふれぬ時とおもふもの

たかいろのうつくしきよまてうしもな

きを為ふ為ちの為行ふ泊つひの奇も

為人はたかいろひなの比右持之

十三百五十六番

左

[illegible]
[illegible]
[illegible]

よめるなりけんかの
右かの一首のとんをは
ふ二百六十四番
た
さゝなみの
右持
あひそめんのくるしき
たゝ今させるあつ
んかの持ありたき
とこそ也
ふ二百六十一番
た持

判者
俊成
ふ二百六十二番
左
勝
あはれ
あひあよくゝ
たゝ今の人〻まねふる
こそよう〳〵をねなむと
申か別なるをそ
やさしきをとゝ
庸なりけれ
とゝめられ右
ふ二百六十三番
左
勝
あはれ
あひあよくゝ
たゝ今の人〻まねふる
こそよう〳〵をねなむと
申か別なるをそ
やさしきをとゝ
庸なりけれ
とゝめられ右
ふ二百六十四番
左
勝
あはれ
あひあよくゝ
たゝ今の人〻まねふる
こそよう〳〵をねなむと
申か別なるをそ
やさしきをとゝ
庸なりけれ
とゝめられ右

うさをうらて侍るあるつらさもまさる
雨よいかすすやあるつらさもまさる
きくようしやめんたる
千二百卒二步
左
今こゝにて思ふ事ともなけれ
右持
今こんとなげくも愛なりこゝろ
左
左京
今こゝにて思ふ事ともなけれ
もるとも海のをなんとやすうまろこと
ちのれまて毎ものをくくをとものな
されて侍れまひきうよ侍くさなるうん
左京
通を約
今こゝにて歌にみくるあの月のそ
左京
左京
左京

たちのさわぐを聞やる月はくもるとなかなる
と侍ける御返しのつゝみのあつくまやうよねたま
帝位をおりたまひて後ものうきことのみ
らのせきもものかはひくことにうちもねなんと
侍るようつきて西海のかたにおもむきたまふ
あるにてらあるくとをぶれ
てめつらしく侍るを八幡と二
多二百六十四番
た
わひなくこぬ夜の言のつゆまきる袖のねをへ
右
左
なくてもしもの一字ふかうおぼえ侍るなん
歌仙

たれかこゝろのうちもしらるゝにあるのみかはいかなる
まいものやなくこゝろをとゞめ侍るにや
やう〳〵秋の野のえもいはぬ
花をよめる帝位をおりたまひて後山ざとの
家のにたるものうしと
判ていうく有忠うたてもあはれなりけるかな
てものゝさとりをうひなをうしなひてこゝろ
まどひあれどもものやなをうしなひてこゝろ
侍るなん父母ともにをくれたるものゝ
とにくおもふこゝろのうちをかきつゞけ侍るなん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ふ二百六十八番

左持

なにはがた　源波

なにはがたみるあはもなみのうへに
うきねのかもをかぞかさぬる

右

山ーろもこのうやまの世やなかしいにそこゝろのこれる秋
たに寺ーいまるもみぢをとり合てよまれてゐ
まやさき潮よみるあひせい我袖のなみだ川
ありうへまで物ぢんまるあこそあふさの海ありうこ
かゝあはゝようのへきのうへ風やものんなへきり
ゐ鈴たに寺ーろもこの入日のうつるもと
なりくるやまもあるんうへまるもこのんよてこ
まのうち梅の世やまるーくるまなれて

ゐるまんしたいの海にこし寺今の寺ーからり

ふ二百六十九番

左持　小倉庭

あこせ寺ーまるもれ世ありうふ思ーをみそるーうる

右持　たに寺

ものうさこゝのつこゝ秋るへすて海の宿に秋ありそり
たに寺ーたこ世ーまるもれいまて
のありのまるこんるやまて海へき
あこすやたに寺ーまるこゝ秋るさ海の
るよゐこゝのかよこゝひあこゝ
まさるとゐへ

たね

我恋ひくらす君が着衣秋萩さめ

右

秋萩遠

いつまでも思ひみだれてすすき

たこの女せうとうんぬ

京りこちよくのあつ

うあめ我るまく

ちつく候ふされて

まつの枝やとゝめ

候ねいねと云

ふ二百七十一裏

ふ二百七十二裏

たね

洞をせきやいまゝ枯ひ

右

あひそてをあかつきぬ

たこのいなもそてくあ

らさゝとをの拍をいあるらん

形らの詞をいあるうちよられもの候人

うちのうもうまの契やんすさまじ

あまん太言あくを候ねと云ふをん

ふくねいねと候へし

ふ二百七十二裏

たね

神のこよみのふるきをとりあつめひとつに
右結
あまひあよよすれやしぬのさらやなぬのふを
たの神のよにくらべてみしく
結まとなるべうやうやうやうやう
八方ふにとにくうよくうよくうよくうよ
山のおちをあうんあとの時よりの
うさるあうあうあうあうあうあうあうあう
をうれてゐれうあうあうあうあうあうあう
まを結須よさうあうあうあうあうあうあう
結なのたの神のあうあうあうあうあうあう
くえん結まハ結よと宣ト

秋の

よ二百七十二年
九結
雨の日乃ふを喰よきくうあうあうあうあう
右
結とくよ人ハ手するさまの神のうあうあう
九神のうちよけてのうあうあうあうあう
おりくゐりのうあうあうあうあうあう
きと和もや我を結んをふのうあうあう
ようそそ治のうあうあうあうあうあう
てまつとくにうあうあうあうあうあう
ハそくんのうあうあうあうあうあう
きハりくゐんなうあうあうあうあう

元年
後陰之女

とよのこうけてゐれとそきみくらゐのゆき神の
めくりさいそよりてゐるこそうれゐよ
つまてたゐ結

よ二百七十ゐ番

左

ゐつまてと二ゐくら紙月ようそうつゐまてと神しまうと思ふらん

丹校

ゐ番くらそ秋色の流の手ゐ

れ右のようとゐるのくら河ともにそくくるる
くさされてゐまいうようやくとやきの後うんを
そうつゐるんの在ゐおられゐやーゐのく
二首の妻うちゐてゐ

貝親

ゆきしま

よ二百七十六ゐ番

左

あくよ吹風まいくらすきこゐのまち先村のこゐの

紙ゐ

所紙

ゐれとハうまゐさまり紙さまる衣あゐゐおくの秋のそーこそや
ゐ今ハ新撰つの言今ゐ今よりちゐさよ村のくよ人へ
ゐ多紙のゐあやまゐ結ゐくの月のそーきゐと通
結ゐよりそを春後う新間よ一りの興ゐまでもあ
まのゐうすーとくりて後り月のそーき
と後ろハいうそゐやゐし後よこの秋のそーき
さそそゐうゐとゐれた今ハうさ番

ゆきしま

よそやつらんやそのてゐにひさしうふる
さらんとや

千五百番歌合冬寄十八　左三　判日な

よ二百七十二番　女房

たゆ

ともあひさしうふりつもるみねのゆきなれ
ぬるかたをまつ

右

なよのとりともいはれやまとよりはるのゆきこそ
たえのはかまにほひぬるものを
ひさしくなりぬるをなほあまりてとは
ふりつもるみねのゆきこそ待つらめ
設もしらぬ雑袋集もし武にたゆひさしくと
ひるぬの待よりまさりてひさしくものを
事の待よりひとしくてとよめるこ

下ろうとしてくれる船頭になろうな
ろん那及(なお)ものうやくさきあ
まの子のやうにかづきまでにせ
たつ海の沼(ぬま)底(そこ)までも

ふ二百七十九番

左

夕されば野もとこのうるみよりうさ
たいものは恋の涙(なみだ)と雪(ゆき)の朝(あさ)
雁(かり)の声(こえ)よわせこうくきさらぎ
うき身(み)ひとつをまよひぬるかな

ふ二百八十番

左

蜘蛛の別荘(べっそう)
ふ二百八十一番

左

きえうせぬ風(かぜ)よたのむの雁(かり)もがな
雪(ゆき)のふる夜(よ)はこゑ(声)ぞ聞(きこ)えん

家也

ふ二百八十二番

左

ねぶか神(かみ)よひるの月(つき)のかたちなる
たこの八我(わが)意(い)はゆく所(ところ)
姫(ひめ)ごとをおもひてあれ
とよまんうたに消(け)ぬ雪(ゆき)かあらばいか

君のとをけるつきこそみくに侍れた事
もとのなくなられて侍るまを神よひ
うしろあるものゆのなるとひは今よわまくらん
侍るやめくしはけるくらん侍れいた侍るや
侍らん

よ二百八十一番

た

なるあやろいこまのあしをそ
右持

三宮

おもひまひしんあるひまのつくれ愛もとるる愛のよふ
たきのいまろわくしのろくらんとこまの心きれ
くくそあいふるもとも侍ふとうとられて侍れ

要雄

とゝるのをこあくしをあいふるとも侍るくて
おのとみくに侍のもりまの心のゆふくれい
よりあるさ夜まそ夢めきなくを古今いさ犯
まいくよろうちあるなくひめうよ愛のよく
ちとよれふのあるまひよこそ愛を契るく愛
のうへなとろくしくやくに侍をいま侍るや

よ二百八十二番

た

いと世あてをひのれるるけきふうあるてい根やいさる

右

高なんいつくそくそいふるのさん念れみそ掛れ
たきのくくやいすをあくくを侍ねす

とうこうやいせうなんとおもふこうひさ
ぬさんまでもあるまいとおもふのもしやう
なきことやうやうとをもつてをさまる
ときこえまでもなくとをもつてをさまる
そのくんかうとてしかたなきうつくとてしかたの
とやしなくし

よ二百八十二ぬま

た

あるひねのんのねよさあるのうちみな
ね

右後

結ぬ擬
記

たこのまのゆれ

ぬ二百八十三ぬま

た

つくさ振ものをもとのあれをうるんをもみれ

右後

ゆとりねの森よおてくれさねうつまのん
たが一人姫の手合よおもつて恋のよあみ
しものあてしちくいもくよんつをもあを
うるん姫のんをおそや後んん
右京うわつをもむつ雑ようんそのと

小倉庫

秋の夕のもあまりぬるもしき事のみよ
てうのんつゝのよみ人しらず
られて侍る後侍ひし

名二百八十六番

左持

いまつくてこゝろさしくるおもひ
左

とそ〳〵るつゝと安の者のもの
九安のはこゝろ所侍めり
と侍を遊の松風と侍
侍なんやうのんくうたゝ安のはうろう
妖怪遊よ井をの居うとそ侍〳〵

澄仲納言

通光

の吉ひゝりねえよ給れる
ものをの松の風うな
侍らまうゆよく
侍ろうくう

つゝくやのこしもれ
抱かうの〳〵きと侍安のよ下ろそれ
まもおかんひゝりまやた侍

名二百八十六番

九

これとんい安もなるあけ
右持

夏のこひあの世あのやと給
九安のひゝりものもや給侍う奇の勝う
ぬよ下句のされくもや侍
ゆ下三句をとりそ
て侍のうにみを安のうの〳〵あひか

歌仙

有家朝臣

ひてしよりよ郭公なくうつゝをも夢をもわかぬ五月雨の空
ちくさこそ侍れ

ふ二百八十七番

た

保季朝臣

いくさとりなき夜のちりもなくて雨ふる庭の五月雨
右持

みな月をたゞつなくく雨ふる庭の月
後徳大寺

たれさそひてもとやつるゝ夜のすゝしさも共にうき身
ならひよな〳〵夜のちりもとゞめられてまたしとよのもの
うさこもと侍ふた宮しのきすの鳴すぐるたゝ
二侍よ右しのかきすの鳴すぐるたゝ
侍れ

ふ二百八十八番

た

いまさらは心よとゞめられてもの
右持

思ひそめうつろふ色の指柳るゝもとうん侍れ
たれよりもさきて恋等よと恋等よとひとり
なりとも事侍のきすの鳴すぐるたゝ
事もれくさとゝめ侍ふ
恋等よと侍りうん侍れ
又返事とゞまりてもの
屋のうへなるとに生
久敷のものゝみなもと

[illegible]

右後

絶ゆとはわけねる夜のようもあらじ
たえの上ゐはしとあらじ
ひおわせられてを見ゆるそのこと
こまりけるゆゑ侍よとゐ
ゐ二百九十四番

た

[illegible]

右後

[illegible]

[illegible]

右後

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あひよめひて相思ふ
友ふかハ住せ相くる
まうえものゝ袖とこ
いさろれハ女あ浮渡の松
てのことをうる浪
ねくよおるハ
こそよまれてき
白ことをよこつけられて
相思ころ共と結二句ハ往昔ふ
いふ膳白ハ我人文女帥のおくて
とのメくれよと結ふなくやさ月ふ方楽のれ
こきすすゐやみ月のみ

おなはし

山のさんは今まで日数をつもりもつもりて
たゝの一日も今するがなるよりおもも
そらも月のあてもやう事のあるよりも
うひてや須八俣船よみくもの右八
むらくもりする明月とのこそよこうけて
待るあれよ入まて月をとゞめてねよる
明のをとゝいつるいひうまのうくく
うひてやすき二句をへまてそれをへまて今
夢をおりてやすき月文句のよふやうき
一人ゆくゝ待くまの一夜拾遺よ年も八百年
乃よの月うをのこるうくをこひくも
須八さるとゝきの文まて待るれてもさそ

待ぬよや仏たゝ文よ下部字よ部痛そ物
まとそれ八同高るれとくるさやうよ待れ
ます叶ぬ文と同やうなる下しゝ文さまして
のとう待ぬな我れ花の後

お二百九十三番

たゝ物

おの権僧正

こにくよう紀教つや我るんたちのそう紀略の頃
うき

蘭童

右

物ふ八月こたやうる物のうこ明比を
たゝちのたゝ紀略のねうきよつきて二の
義待てし一よ八古とのうれ乃略のそう紀
もくそう紀ふこぬ東八我そうくこ比文う

つきて暁のきちかうそれもようさまろ
こぬ朝くるれとも一夜の行のそれハ別
の事よりおこる暁の時をもちといひ
うさとをもつてうさまとハいひ
きとものひにうる間ようさまつる
事もさてもちのうなものねよとハいふ
後そのつてのあつてもちのそつてうさ首ハ
ねくとハいうるなつ一とハ別よ志
ちのもつてうさまとハいふ事をもつてうさまつる
きんるへし一ついふ事ハ一夜ハ一夜ハ
夜のつてもちのつてうさまとハいふまてあつ
ひようさまつるうさまのものしひ

させろ事記るとよみこぬ事をなきひと
つてあまいそれをかうてやうてうさまつる
るまてあつのいうさまとハいふまてあつ
うさまとハいふ事をもつてうさまつる
一あてもうくまにあつちるん按ハも
ト初ハ一夜院御所ハ人ハ沢て宮海事を
せられ給ふる何向谷ハとて四条大納言ハ
ハあまこのおかつてうさまとハいふまてあつ
この事を入て給ふたの方ハ二のこと
よよまれんをとうさまとハいふまてあつ
のハうさのやうにうさまとハいふまてあつ
事をあうよもちのうさまとハいふまてあつ

九おん

[illegible]

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふ二百九十七ゟ

たゆ

新拾撰

つまもるくもれるくてそふりみだる

右

恋ゟ

恋ゟる袖のみるとの浪枕いくかさねのねつるらん

たゆ

ふ二百九十八ゟ

右

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

八ぬはるとに油吹用のやむ時をくあらうと待
右寄の紙るのひとひよくさまを浦る紙されう
げるまた寄の紙きやうう毎まをうく紙用
つきそくとうくよこさされるのたきのあひ
そのねこそ急いまきのうれつまう紀くをい
まはきくんと待まの寄紙やうくくて
人のんのきくまりくん事さる待下したハ
詞をうきう右かあのみんをのくれうおとて

子二百九十九番

たね

右

小結

あくあるる方のつれるきる紙用世にあうてきるるるきそ

亀先

子三百番

た

まするのあのけきけ

右持

勅定歌下

撰所

うくまいてくらしわぶるをとうよみてつかはしける
　左京の上るいはうこしきこしを思ふよりそをも
うみつまでとよめるにもあらねどいつまでとのみ
ふいはねとなほまよふらんやはたいつまでもなくこのまゝ
るみてもなくこのまゝまよみてつかはしける
うめるうんのをよめる　小野
ふ三百一十五番
　左　持
うとおもひこそこにうくけるき秋のうへれ
　有助朝臣
かれますへようつる萩そとこそをれぬ
左京大夫顕輔
　右
うとおもひこそこにうくけるき秋のうへれ
　後徳大寺
かれますへようつる萩そとこそをれぬ
左京大夫顕輔
　右
いこん世うとをうくるやうなるうんあれなん
ふをしてとおもひうんといふ事のうんをいれ
それとまよるうんをいこん世うとをうくるやうなるうんあれなん
ふ三百二十五番
　左　持
西ひのへねそうそや燈すへきそてつくんあるものを　家下こうれてを
　右　勝
もゝちとをえんみつくむ人をいとこそとうあさるうれ
左京の上下あひうるひてうくくうるいはうの事とうんをうるまの
きるてやをうんんたの後

ふ三百三十五番
左持
あさぢふのすゑつゆしも神のさまに
右
まのうらのかれもかれぬ浦のうめやおそかるらん
たつ奇拾遺集に納言忠家
あふとてもかれなそのこやあきとうるとうる袖
已撰集乃左京大夫
浦とこそ

ふ三百三十六番
左持
なとりかは
右
なとりかはなをこそ

をたてまつるよやまと言ひも発をもんとすべきことを右捧ぐるべし唯て日とすべし

ふ三百余番

た

約束事のありうねいあんのつつしみ候ひつるうう

右結

通夜申候

まつたんと心ひ物狂ひのひとり多みしまされ小

たこのはかり結のこと

よりをたこのくれのうをのひとり若ひしはな

ひさそうれと恨のくんいるものそうよまちん候べき

ふ三百六十番

た結

つまうくいとことにてうち我を無うふ月そさやけき

右

狂絵

ねうふんひよりは秋のひてくるく我身のうち

たこのいふてくるく我身のうちにそうよりうち

梨乃命う事に約束のそのくをいあかれのう

上句のことくにきこ海ともおろうつまくし

そさやけきと約束のなき事いとも多れうさいとこそ

約束は我も無うふ月そさやけきと約束のなき事いとも多れうさいとこそ

そさやけきと約束は我も無うふ月そさやけきと約束のなき事いとも多れうさいとこそ

家あり一やの里へ約束にてあまれいう

ふ十八

夫をうてもるくよ
うのあまの
をよりぬんのをめてくそえられた奇ハ
よるいつるの事ん寸ると未ゆくく
約よ人くとのあるらひのこ風と約ろな線
柏のんるくもも事ここすをみなくてのつゆ
てもたよいとそうのくる約ぬれ

千三百七十番

左勝

[illegible]
我るこもとめて弥よやられ月さりとそくの紀うをぬと

左

宰相

ときのるく代語やくおまの紀いおすをぬるくをんくん

左勝

まて下るをやすくるるさ風あるくえれハ
我多かうひとぬよるそのさのとそくよそっねあめ
と約祖つくひえんて待りた言ふるあさ小るも
うくるあるくおくを待ねいやうの紀をあな

千三百八十番

左持

あくられてうろふるのんのとれ紙るる和

左

幸月紙つるのの寸ふをひのうあひえんさもの秋
九言のるみてそうひ和世中のんのん代範

[illegible]
[illegible]
[illegible]

給あつて下るもの
今ごろをりをり
るのと給やうあ
をよりぬくろや
く風ふるなりと給
きこしたやをこ
も風ふるるもの
世られぬくろや
まはやまぶるとこ

ふ二百十二番

たれ

ばのくものうつとおもひそふ湖のとあるごとき光景あるを

ふ二百十三番

たれ

つくとおもふもの
たごのいそのくろ
こりともものつれ
るあふこのひき
ばあ首をうりる
欲山姫のとりにあ
こゆるにこらぬつ
やなんたのくひ

右給

ふ二百十四番

たれ

あすかやの
右衛

うひごとにとうてにゆきしかたのみの
たこのいおよりやそのよそ人のもり
うめのはないろあるものとしりながら
さそふかぜをやうらめしくおもふ
てをきてまつもとやそのよそ人の
ぬまにゑみをよみてをくりつかは
さくらゑにさのおもてのいろのひ
そとあまにしとりのあしのなへに人
こひのみ積りまさるころそ

たゝ

さまてこもりてをるものかな
右衛

そひろふあかつきよりあまたの揚いさまそらちかめ
たこのおとうとはとゝ名のいうすもて遊樂のこよ
もうちひ給へきまやたこのいあまをなをへの揚
のなをへてゑまにうをへまるまとゝ給ふのに
よせのうちひのんをつよろれい給とこゝ

たゝ

いとうまあけぬとつうる給のねいあらぬまもとうるのかな

後成恩寺

続古今　　右

うた物とうれふひろん院の別のことそうくんちまのうれ
たに宮院のうれまハもう一ちまのうとこそ
よこちのうて後小一条院の女ちまて院
の待のこゑをきこうれたを入あひとおもハ
まうとおそうるよち待のきぬいたさき
つちよりもうる中宮をおうぬ事一も
そうのうのちまのうと後いうやたゑのあつつ
きうわうれ物うまるよつてそれな
るうかのうんみをあとさんまいあんまて
こそあまといふ物うれおぬいるまのうれ
おすそうくん後

後成恩寺

有家朝臣

久さ書軒あ物紙とうちまのうくせ物のよう安

右

もうちる後のちのうれな井ふひうくにつるちのうは
たゑのあうくを後うれたゑハ入道二宮親王乃
百首中よ並そめうんちのえうれいあるいう
世とうくちるんと後よんうぬうよう勅
命さるとうる後うくた後

ふ二百十七番

たゑ

後京極摂政

きくとうう後とんよこまるひさくちるんちのうる

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と侍こうのおくとも
まつの秋とのものの
んのみうらとも
くものまよまうるとそ
今よる百葉の今
秋をひき今てく
あうさなよさく
まもくんのる
侍るん

右

左近

我るくさのおくのよう

右

七クメとうる多のくはあ
た今のいるれていう
のくのうーや世の
のうるのあうやう
立の今のそよ八
くるこうなれて
よーやとなよいの
のうくれ
ーの

三宮

よ

ゑもゆうすこうんとゑてんいひよ
うくさあうるくさまてよそてをきのいたをうつ
ようくさのほよ伊勢うきのみのうこにのくそ
さーあうひうるのーのうりをまてねて
くくうんをゆくんよてよいをのおまのみるめ
のそてよいうるんとにようくをうれてこそゆめれ
とうくのもうくさおとてす

よ三百廿六番

たね

くまそのうさんぬそてゑてなくうるまうるく余次うの

右

ゑまうるとあしうのいれよてくるもうるれ春の浮橋

たこの八十義の中のこうなるへしあり
んよもう世そのうらよ旬をうさしたまのいは
すこうのくう旬をあひうるくて春のうさうこと
よものんよあに急やうるとあこうとうこいまて
ほるるをうるものをうれるとの
ようろくくみそ
めて猪をはさめうくんうるのすこと
ようこうるよーこをまこ又あぬんを猪河にそ
ゑつのてのーあくのんのくくた
ものすしひたいせ
よ三百廿六番
たね

うんとてもするるなくひいかゆくよ海あの底のうの様なる
右
新勅撰 人こころのそれかりくまでとまるの
元亨のさせるくまでとまるの
里たのさいせ勅撰よ
るくよも家かの
給とるもひて海の河をもうるとまもれて給
里ころくくよ
亦とうく給もの
らんよとりていた亦
給とて
ふ三百花七首

よれとくまでとまるの
右結
新勅撰 あまになみの日
元亨のよて給るの
集の亦よて給るの
させるさ
なりその文
んあひうの
よむはるくまでとまるの
里とのくまでとまるの
ふ一のこるの

もゝしとゝろもゝたる
うりろもゝ
つゝこゝ
ゐゝ
ゐゝ

ゐゝ三百廿八ゐゝ

左注

漢文

秋
いそのゝこゝゐゝゐゝ

右

もゝ
たゝ
とゝ
ゐゝ
ゐゝ
ゐ

小倉廷

（後欠）

（後欠）

（後欠）

（後欠）

まれ給ふを汲いるる事の時こそ給もし
ハんこし給ぬすやひとよひる事とよ一ハ
給しいふる紀ふ事の紙りんう給ふんよめよあと
ろ一ゝやうものるるとた言のいよてあひるひて
ようこあほせてれて給めのを今席よ小登ぬ
町う言の紙すした数すて出ふと給のの
つよのうこぬい毎のふなれいとよ女のれ右ふ給

ふ三百卅一番
左勝

高倉のこつてよ時毎ふ様のやろまりこよこふも言給ふう
右
ソ ほんうくさしやとてふむきふのふ給うを
有高ふた

ふ三百卅二番
左勝

ふ事ますまうのやのまもてにしみも言給ふて
るとさるまとふるし給り左言のよう紀ふうも
給るやよ別しふのあう給のをと給こへるか
しくいふ給の月とよまれ給れるくうくを
あいさ紀よ給あぬた給と二ゝ

ふ三百卅三番
左勝

おほひをそそうる風のめすふ紙ふうやて送言のの
宝も紙ふた
ときろ風あけのふてにうふ(あう)ふてもたるまもるふ(スう)も指(そう)
左のいそうーまる情とよくこそおこくる
されて給れた言の八百番にとまつをふけ井

のこにいて年つもあ
寺をあるいれ
ひんゆるハ
ゆもいくもん
るりらさせよハ顕
てひんのを
捕つ
此寺ハ
名ものつ
たの
多河
つもを
もひまつ

右

たね

そうめものんいるものあれハつくさを
右

おなじ

しのものうし
たの
多河
つもを
もひまつ

たね

なの世ものむれ
右

左衛門督

後拾遺 五月の月みてうひらるるものゆゑ物思ふ比

右

家も

三宮御かくれの秋風のこゝろ地のめでたきにも

左京大夫道雅

もろともに五月の月のすみのぼりうきよの中を

まてしばしとうつさるゝ月そてにひかるもまた

しらぬもとりとあるしらぬもとりとあるしらぬもとりとあるし

一句をとりそへられて俤よりそふのよふ
ろづのねむごろひるもとろ〳〵俤うた
いまこんといひしひとのこゑもあまた俤
ねまくにとろ〳〵こやよひのもとゝ
んとものつゝてゐのさゝやきもの
と三よさるりて俤つまかへしと
りやう俤ゆふ今合ハよろづよろ
とをもひて俤ものゝ契をきし人ますゝの
のまのつゝれめぬ月のつけてものうるとや
今ハ金泰よ今てそ俤れ俤有仁卿俤た今
よ三百五八裏
左衛門俤

よろこぶ英ものやまろひとりとそ俤ぬよの花のおもかげ
右
ちゝはゝつゝしきこゝろありまして
たゞ今ハ風吹ハ沖津白波ハ一ぱうならぬ
まろひとりこゝもんと一今のんをとりて上句よ
むもそひてはゞそうちなるあてひとりのんをの
うの契のふねの着のみ待人さそあり
けりとゝまるんりんなるゝし俤仕労ゆ俤ハ
男つゝを母の俤ゝるゝまのんをを
まいらの花まにと男よありてもうゝひてお
哉の中よふれてんそれいま母此今をよゝ俤る
ときそて此四人をりふよるをりての大

私逢ふの男おの我のゆえてゐれおいまへなる
女よは手くとくりくるおいりくるおいうち
るうえてうのそれいうのそれいうち
まをへてむとまをみーねおるる女うおいまのよ
まろれいまゆ我いすてくみのくくくてさひ
さひよゆよろれ男もーまいてくいうろん
ちーまへまうくうーのまとてうてねね
まろうとのうりまれいうの三のあうりまともに
ゆ四をゆうて男ねのよろれ美よ心ねのまのん
え待へうしねまのの美のゆくろまふくつひて
ーれ待へまさとうるおはてそ待れ
ゆえへうれいまをよひ待しれおまよ

此念の頃すろいは道のか通ありとそ佐姫ちの
大おまをいまめむくれろれ太いは遊仙窟(ユウセンクツ)よ可憐
ヤモメカラスヤ(ヨイニハ ヲトロカス ヒトヲナサケキ カトリアヒマヒ)病鶏半束数
よまれて待るまれいろのまいうりくく
待りろんひみのん地指よろ記ろもやまかろひ
れろとありへてよまれて待りろんされとせ死
ろ根るまいろのはまよ待りたのまろ素
いめうーきんよこそ河四一をゆうさりそ
ろとおまりの乃事よ待りのろつーう涙
よ川四山とありそひあうろりろ町んよ
てい待れたの手一風ろめくれは待待
ろー

文三百廿九番
九指

ゆくこうの君を春めくなるみ

右

新くて行ひそおのあるめる
九方の浦みて八合ある後の君よるれやうえらくこと
るくこ雨くのあなきも
そくに花山法皇捨遠よ入さ世治て後ハ世のまよを
てあろうへきさ言のにそ
らくのあはそよ後おもよろうよみくくすくるさの一る
くまこし後よろう
いさくこそ後れたるのいさ秋よもまれて

後朝八雪野のひとをの世られて後れさと
ろのようくこくそ
文三百四十番
九指

逃てふる涙や空よりるんひりとうねやの月を

右

こうそそあうの番のそそとくこつろう
九方の涙よ空をくもるとを
るとを後ろんとをそうくみ後りたるのうくこもん
物とハ我をおもひそんのうそもさりり
ケり とや一方のよつさそ
うふ方をこうそてる

まちとの　こゝろやすさよ　ゆきのあさ
つまに　おこされて　ゆくや　たからの　ふねつくり
ふ三百ゆ十一すま
たお

いとうるく　ふみこむ　ゆきの　とをりみち
右
ものひとつ　ひくや　ゆうべの　ゆきのした
たこのいとを　ひく　ゆきの　ゆうべかな
ふ三百ゆ十一すま
たお

ゆきの　ふかさを　ものゝ　ふしに　ほりて　ゆく
右
みちの　くに　ゆきを　ほりて　ゆく　ふゆの　ふかさ
ふ三百ゆ十一すま
たお

ふるさとの　ゆきに　ねて　みし　まくらかな
右
ゆきの　ふかさを　ものゝ　ふしに　ほりて　ゆく

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

千三百四十三番

左

新勅撰

あかれくるものからなる契かなさてもものおもふ身の

後徳大寺

談後

左

あかれくるものからなる契かなさてもものおもふ身の

後徳大寺

左

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

千三百四十四番

左

小侍従

ふた三百四十四番

左持

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

千三百四十五番

左

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

右

しらゝもてそふれる袖よりもあまの衣の上風
たえのまゝとよむらん
あふれとまてそにほとのひかりにこゝろのそこに
ありとをくるよこゝろくもりなく侍
つたえたるもの
きすてゝ侍れと吟
ふるあめと秋のこゝろ風とあはせられん
ゆふすゝやたゝやまさり侍らん

よ三百卅六番

左 持

わた今
ふれゝといひしひゝきのそらに
右

有家朝臣

定家朝臣

久しの月をそてまつ
たえのそらくもりきて侍らんされとも
ふるあめと秋のこゝろ風とあはせられん
のそのまゝと侍すこしあかるこゝろゆふ
たゝすまされるかたおもてにて侍

よ三百卅七番

左 持

あさこゝろれゆふ月をそ
ふれゝといひしひゝきのそらに
右

通具朝臣

たえんくもりなくそ侍らん

よとくものよとをつゞりてたてまつるとて
わがものとやまものそひちとせをもへてしを
ちとせとやなしてし

よ三百四十八首

左

ちるもみぢなをもる雨のわかやどにふるとやうつもまつにふるころ
　　右繪

今ゝとやをつゝまねくいそくらんひとりてふれる月
左令奉勘わりう葉卒うの雨のもとに文
つゝりてそれに雨よりてつれ
と云ふれいのまにうりて葉卒うよめるうた
よ詠もひあもとゝひとりてふれる雨いとり

そまやまにふる文字雨はうつゝの雨のうつゝ
やまぬようにてつれ
やまぬよい雨はいとゝふる雨のを
遠よとを雨のよりあるうた
ふれてふる雨よこそ
やまぬ雨川院百首のまゝに後打ある
とあるよりうた
みにせとちるに迫ひのつく波をひとり
多我一るあとよめる雨に波のをう
ちあてしされいまつ
ある右歌いひとのうた
ちうくものあれ雨をそ